

地域と「よそ者」が 混じり合う場づくり

—息づくまちは いかにつながり続けるか

「地域におけるよそ者の役割」を考えるにあたって、ひとつの事例を紹介する。
舞台は2017年にオープンしたシェアアトリエ「ヨリドコ 大正メイキン」。
大阪市大正区泉尾にある築約65年の長屋「小川文化」を改修し、クリエイターのための住居・店舗付きシェアアトリエに再生したそのプロセスは、よそ者が、地域で紡がれてきた物語や知恵を尊重し、長期的な目線で、丁寧に地域と関わろうとする姿勢がうかがえるものであった。

インタビュー

【オルガワークス株式会社専務取締役】

細川裕之 Hosokawa Hiroyuki

【一般社団法人大正・港エリア
空き家活用協議会(WeCompass)代表理事】

川幡祐子 Kawabata Yuko

加藤しのぶ=取材・執筆 宮村政徳=撮影



小川文化再生物語——プロローグ

物語の舞台となる地域の話から始めよう。大阪西部に位置する大正区は、江戸期の新田開発などで造成された海と川に囲まれた区域である。明治期には区内に大阪紡績会社(現・東洋紡)が創業、大阪の紡績産業の発達を牽引し「東洋のマンチエスター」と呼ばれる原点ともなった。戦後、紡績産業衰退後も中小工場が立ち並ぶ「ものづくりの町」として発展してきた。また、大正期よりその働き手として沖縄からの出稼ぎ者を雇い入れたことから、現在も沖縄出身者が多く、沖縄物産店や料理店が軒を連ねることも知られている。

この大正区内に昭和30年代前半に建てられたのが、物語の中心となる2階建重層長屋「小川文化」だ。

「昭和30年代から高度成長期にかけて、大正区内



2棟ある長屋のうち右側(北棟)をリノベーションし誕生したシェアアトリエ「ヨリドコ 大正メイキン」。2階が住居、1階が店舗付きシェアアトリエになっている。「古い建物はカッコいいものだ」と知らせたい思いから、屋根に使われていたトタンを2階の壁に使ったり、古材をはりめぐらせていたり。



1階入り口のショップから奥を覗くとアトリエ部分が広がる。仕切られていた壁面を取り払うことで長屋の特長を生かした奥行きのあるつくり。



ショップには、オリジナリティあふれるカラフルな革小物、刺繍がアクセントのユニークなTシャツや可愛いイラストの手描きスリッポンなどデザイン性の高い作品が並ぶ。

には工場労働者向けの木造賃貸住宅(長屋)が多く建てられました。南棟と北棟の2棟の長屋が並ぶ『小川文化』もそうした住宅のひとつでした」と川幡氏。川幡氏は、「まちの住宅をよくしたい」という思いのもと、住まいを軸にしたまちづくりの仕事に携わり、現在は大正区や港区にある空き家活用をワンストップで相談に応じる専門家集団であるWeCompassの代表を務めている。

川幡氏によれば、大正区全体で工場の縮小や廃止によってこうした賃貸住宅の空き家が年々増えており「小川文化」も、ことに北棟は10年以上賃借人がいない状態が続いていたという。いざれ壊して建て替えるか更地とするかで見られていた長屋である。そんななかオーナーが代替わりすることになった。

「古いけど、カッコいい」——3代目オーナーとなった小川拓史氏は、老朽化が進んでいた「小川文化」を見た時、素直に思ったそうである。仕事

「ヨリドコ 大正メイキン」は、JR大正駅から歩いて約15分、商店街にほど近い、おだやかな暮らしの息遣いが感じられるまちにある。

道路に面した元長屋の側壁部分を入り口にして、そのため、正面から見るとごんまりした印象の建物だ。しかし、白壁に窓を大きく取った1階部分と、古いトタンをめぐらした2階壁面との意匠の対比が味わいを醸し出しており、通りすがりについ足が止まる。誘われるようにガラス越しに中を覗くと、壁を取り払った奥行き深い空間が目に見え、さらに周りには何やらつくっている人の姿、いたるところにディスプレイされた、商品と思しき品々——見るほどに「気になる建物」なのだ。

この建物の再生に携わった主要人物は、すべて大正区外出身、つまりよそ者だという。そこで、プロジェクトにあたった主要メンバーのうち、アトリエの運営に携わるオルガワークス株式会社専務取締役・細川裕之氏と、プロジェクトのプロデュースを担当した一般社団法人大正・港エリア空き家活用協議会(WeCompass)代表理事・川幡祐子氏に、改修にいたるまでの経緯や実作業について、またその後の展開までさまざまなお話を伺った。

おふたりに訊く「小川文化再生物語」から、「地域でよそ者が面白いことを始めた」という表層にとどまらず、地域の歴史を尊重し、長期的な目線をもって取り組んだ場づくりのプロセスをひも解いていきたい。

で東京と大阪を往来していたが、大正区を訪れたのは初めてだった。それなのに、どこか懐かしさを感じるまち。そして「カッコいい」と思った家をどう活用するか。物語はそこから動きはじめた。

地域に新たな光を見いだす、 よそ者の視点

小川氏はまず、友人でイラストレーターの神吉奈桜氏に、現在もわずかながら入居者がいる南棟の空き室に住まないかと持ちかけた。兵庫県たつの市で築100年ほどの、戸も閉まりかねるような家に住んでいた神吉氏は、小川氏の「前の住人の荷物が残っている部屋だが、自分で片付けからするなら住んでいいよ」との誘いに乗ったものの、想像以上の荷物の量と老朽化の進み具合で、とても住める状態ではなかったという。

快適とは言いかねる環境での暮らしを楽しんでいる神吉氏ならばと小川氏が見込んだからとはい



改修工事前の「小川文化」。特に北棟は誰も住んでいない廃墟となっていたため外も中も荒れ放題だった。



「耐震改修見学会」では、施工担当が耐震改修方法を説明。また「耐震補強計画の説明会」では、耐震設計者と工務店の話のほか、隣棟住人による大正地区と長屋暮らしの良さについても聞くことができた。

え「今考えると、ひどい話ですよ」と笑う細川氏。小川氏とは20代の頃から付き合いがあり、デザイン業のかたわら「単にモノではなく、人を育てたり、能力を引き出すような人自身をデザインする仕事」に興味を持つようになり、小川氏のシェアリングビジネスの仕事を手伝うようになったそうだ。現在は仕事でもパートナーという関係だ。

「女手ひとつでは無理だと思った神吉さんは、自身のフェイスブックで片付けを手伝ってくれる人を募ったんです」（細川氏）

ネズミの糞が転がっているような南棟を人魚棟と命名し、前向きに奮闘する神吉氏のSNS発信には多くの人が反応し、意外な人も声をあげた。当時の大阪市大正区長であった筋原章博氏である。現在港区長を務める筋原氏は大阪市職員から区長となり、人口減少が進む大正区を何とかしたいと自ら精力的に働きかける名物区長だ。空き家活

になれるかどうか。そういう価値観ならば、『縫製』をもう少し噛み砕いて、制作の場を探すクリエイターたちの拠り所になる場をつくってはどうかと言いました」

細川氏のアドバイスをきっかけに、クリエイターが集う住居・店舗一体型のシェアアトリエにしようというコンセプトも決まった。資金的には回収に10年かかるような、ビジネスモデルとして型破りな提案だが、「以前、小川と一緒に北区にシェアオフィスをつくったことがあり、それが数年かけてじわっと成長してきた。そういうビジネスモデルがすでにできていたので、それをもちこんだ」そう、大きな不安はなかったようである。先のシェアオフィスを「ワーキングする拠り所」ヨリドコワーク」としたこともあり、ここは「大正区でメイキングする拠り所」ヨリドコ大正メイキン」と命名された。

よそ者から地域に関わっていくために

実際の工事は、暑い盛りの7月から始まった。そこで川幡氏に作業にあたって大切にすることを、地域との関わりを中心に訊いてみた。

川幡氏によれば、今回のプロジェクトにあたり、細川氏からの意見が「工程はすべてオープンに見せよう」だったそうで、そのための取り組みを考えたという。

「ハード面については、この建物が耐震診断と劣化診断を経て改修をしていることは大きいですが、費用はかかっても、安全であることは大切です。行政が支援すべきだと判断するのもその部分なんです。それを一般の方にも知っていただくために、耐震改修現場の見学会を開催しました」

用問題にも積極的に取り組んでおり、『彼女を助けられるのは僕だろう』と、本当に現場に駆けつけてくださった。それからは、地域課の方や区のプロモーション担当者などを連れて来られて、区全体で、ひとつの長屋を住めるように手伝ってくださったんです」（細川氏）。

つながりはさらに広がっていく。大半が高齢者であった南棟のほかの住人と神吉氏との交流が始まり、神吉氏が主宰する絵画教室などを通して地域とも付き合うようになった。徐々に人魚棟がまちに受け入れられていく様子を見て、小川氏は「この2棟長屋が若い人と高齢者とのコミュニケーションの場所にならないか」「そこで高齢者から若い人に引き継げるものはないか」と考えるようになる。そこで思いついたのが、空き家のまま朽ちるのを待つかのようにあった北棟の再生だ。しかし、ハウスメーカーやリフォーム会社など関連業者に相談するも、口を揃えて建て替えを勧

マニアックな見学会、せいぜい10人程度の参加だろうという予想をはるかに超える60人近い参加者が集まった。若い参加者が多く、耐震や安全性への興味の高さがうかがえたそうだ。

さらに内装を業者に一任するのではなく、「DIYワークショップ」という形で一般からの参加を募ったそうである。ワークショップはふた通り。ひとつは一般参加者向けとして、古い建物の良さを生かすために、撤去した古材の再利用や壁のエイジング加工などを工務店店主に教わった（計4回、約30人参加）。もうひとつは、サポーター向けに5戸ある2階住戸の内装の企画とDIYを公募して行われた（計約50人参加）。一般参加者向けのワークショップは、川幡氏からの発案を小川氏が快諾し実施に至ったという。「本当は内装も工務店にお願いした方が早いし、精度も高い。けれども、一般参加者向けのワークショップをすることで、地域で空き家を所有する



「2階住戸」は、内装の企画とDIYを実施するグループを公募し進められた。デニム柄の塗装や撤去した土壁を活用した部屋など5戸それぞれが異なったイメージに仕上がった。



ワークショップの参加者には「まかない料理」がふるまわれた。料理づくりは神吉氏のご家族や地域の人びとも手伝うなど、お互いの理解を深めるうえで良い交流の場にもなった。



クラウドファンディングで一部資金を募ったが、目標以上の120万円が集まった。その成功報告会やトークショーなど直接情報を開示する場が多数設けられたことも特徴的だ。

められた。それでも諦めきれない小川氏は、大正区に相談、そこでWeCompassの川幡氏を紹介されるのである。

空き家の活用にはクリアすべきハードルがたくさんある。ことに耐震性を有しない建物の場合、事前に耐震安全性や劣化度のチェックははずせない。「小川文化」北棟は、耐震診断、劣化診断を受けたうえで耐震改修を行うこととなった。後に小川氏はあるインタビューで、当時の思いを次のように語っている。

「この物件には未来があるって、なぜか勝手に思い込んでいたんです」

未来がある——地域における新たな光をよそ者である小川氏が見いだし、それに賛同するよそ者たちも関わり、地域とつながりはじめたのである。

クリエイターたちが「住み」「働く」ことができる拠り所として

耐震改修後の北棟をどう活用していくか。当初、小川氏は縫製工場をつくらうとしたそうである。大阪が紡績産業で発展し、このまちに工場があった歴史を踏まえ「まだ今なら、おじいちゃんおばあちゃんが蓄積されている技術を継承できると考えられたようです」（川幡氏）。同時にその構想が現実的なものかどうか、小川氏自身が悩んでもいたという。そこに打開策を提案したのが細川氏だ。「小川には、ビジネスというよりはソーシャルな観点で、縫製の現場の人たちをどうにかしたい、という思いがありました。このプロジェクト後に会社（オルガワークス）を立ち上げて仕事をするようになりましたが、打ち合わせでも、儲かるかどうかという話はまず出てこないんです。新規に何かを始める時の判断基準は、関わる人全員が幸せ

オーナーさんが実際につくってみる場を設けたかった。そうすれば、区内で同じような木造住宅をもつ家主さんが自分でやりたいと思えばやれやすから。また、サポーター向けのワークショップは、今後の空き家再生におけるサポーターの育成を行いたいという意図がありました。実際にはインターネットアーティネーター仲間、建築系専攻の大学生、DIY好き社会人などのグループが参加し、1室ずつ担当しました。おかげで2階住戸は、5戸それぞれに違う表情を持つ部屋に生まれ変わりました」

ワークショップだけでも画期的な試みだが、ユニークなのはその際にまかない料理が出されたことだ。

「暑い盛りのワークショップでしたから、せめて食事の時は皆でワイワイ話しながら、『ここはどうしたらいいですか』と相談したり、『今度手伝いに来てもらえませんか』などと頼めるような交



オーナーの小川氏の想いを受けとめたプロジェクト開始時の参加メンバーたち。イラストレーターの神吉氏や今回お話いただいた細川、川幡両氏などよそ者たちが中心となりコトが動いていった。



アトリエは中央部分の共有スペースがあることでクリエイターたちによるコラボ作品も生まれやすくなっている。また入居者全員でアトリエのプロモーションリーフレットなども作成。「ここを自分たちの暮らしの一部として捉え、ここを愛し、愛されるにはどうすべきかをすごく真剣に考えられていることに、僕ら運営側も励まされます」と細川氏。

流の場にしたかったんです」

同時に、SNSなどでの工事過程の発信も行った。担当は神吉氏である。

「どういう形で工事を見せていくかという話になって、神吉さんが『工事の過程を漫画に描きま』と。それも人間の裏側を。神吉さんは、『建築家が立派なものをつくりましたというだけだと応援する人が増えない。建築家といえどもがいていて失敗もする。できあがるまでに苦労している様子を見せた方が皆が応援してくれるだろう』と、私たちが悪戦苦闘する様子を描いてくれました(笑)」

神吉氏の目論見通り、SNSを通して数百人の人が工程を見守ってくれた。また、大正区も折々広報で紹介してくれたそうで、「公民連携といいますが、これだけしっかり関わってくださることはあまりないことで、有り難かった」という。ほかにクラウドファンディングなど、さまざま

達を連れて、『ここでひと声かけたら奥まで行ってええねん』と言ったり(笑)」
入り口に大きな窓ガラスを入れ、外から中が覗けるようにしたのは、ここが小学校のスクールゾーンにあたっていても関係しているそうだ。「子どもたちが、中でのものをつくっている様子を見て、将来ものをつくる人になりたいと考える人も出てくるかも、という願いも込めています。実際、覗いてくれるだけでなく、ボールをおいかけてヒューッと敷地内を自由に走り抜けていきます。今後は、小学生を迎えるイベントもしたいと考えています」

では入居者、つまりここをものづくりの場として活用するクリエイターから見た、「ヨリドコ大正メイキン」はどうなのだろう。

「ここは基本的にパーソナルスペース同士が重なっているので、お互いに干渉し合うし、迷惑をきちんとかけ合える距離感があるのです。細長いので、それをきっちり分けたり壁をたてるよりも、通るだけでも『ごめんね』と声をかけたりするよ。うな、外の人が中の人とコミュニケーションをとらないと楽しめないのと同じように、お互いに迷惑をかけ合いながら、見えないルールをお互いに築いていくことが必要になってくるんです。この場が自分に合うと感じる人が自然に入居されていると思います」

現在、1階シェアアトリエの契約クリエイターは6人、ほかに2階のアトリエ兼住居に3組。地元大正区内から通う人と、1時間以上かけて通勤する人が半々という割合である。全員がここに入居して良かった、と言う。「ものづくりに専念する場ができたことで、自宅をつくっていた頃より集中できる」他のクリエイターから刺激を受け

まな形で周知をはかっている。話を訊いていると、この再生プロジェクトが、行政をはじめ、地域さらには一般の人々を実に巧みに巻き込んで進められていったかがうかがえる。それは沖縄県からの移住者を早くから受け入れてきた歴史をもつこのまちだからこそ、うまくかみ合った面もあるのかもしれない。

多くの人が関わった改修工事は11月に無事完了し、2日間の内覧会が開かれた。当日の印象を細川氏は次のように語った。

「実は内覧会の時はすごく不安だったんです。地域の方に、『ヨソモンがきてオシャレなもんつくっても俺には関係ない』とか、『昔の方が良かった』とか言われたらどうしよう。けれど、実際は自分たちにとって何十年も思い出にあるものを残そうとしてくれたと喜んでくださった。『昔、この2階に友達の家があつて、遊びに来たことがある』と思ひ出話をしてくださったり。2

たり、コラボなど新しい取り組みができる」など、大切な「ヨリドコ」となっているようだ。

エピソード

おふたりに今後取り組みたいことを伺った。川幡氏は、ひと口に空き家の再生利用と言っても先述の通りクリアすべきことも多いことを踏まえ、実現可能な方法を提案していきたいと言う。

「このまちは、小さな工場と、その工場の隣で定食屋を営むといった、仕事と住居が一体化した小商いをしている人が多い地域です。これからやりたいと考えているのは、住宅の一部分でいいので、空きスペースを貸してもらうことです。そうすれば片付けや改修といったハードルが下がりますし、それを家賃や、ちょっととした小遣い稼ぎにすることもできます。また、お金儲けより地域に役立てたいという家主さんも、少しずつですが相談にきてくれると思いますので、それをもっと行政などに伝えていきたいと思います。そういう選択をする人が今後増えればまちも変わっていくって、より面白くなっていくと思います」

リノベーションや再生してきた建物をどうするかなど、あまり他例を見ないようになっているという細川氏は、場づくりや、「ヨリドコ大正メイキン」のこれからについて「意図的に海に沈めた難破船」にたとえる。

「難破船が沈んでいたとして、そこにいきなり魚がわーっと集まることはありませんよね。必然的な循環が生まれて、生態系ができるようになるには当然時間がかかる。ヨリドコも同じです。ここにこういう場ができて、周りがどういう反応をして活用していくのかという、自然の反応の方に興

日間で5、600人の方に来ていただきましたが、地域の方が多かったのが印象的でした。ここが残っていくことで地域を元気づけることになるなら、それはよそ者にしかできないことなのかもしれません。よそから来た人が客観的にこの地域を見て、未来を感じる面白い場だと思うから、お金をかけてでもつくりたいと思ったわけですから」

コミュニケーションを通して「混じり合う」場に

完成したシェアアトリエ「ヨリドコ大正メイキン」1階アトリエの特徴は、壁を取り払った開放感にあらう。入り口を入ると土間があり、段差をつかったアトリエ部分が続く。細川氏によれば、極力境をつくらない設計を依頼したそうである。「どうしても建物の中と外というだけで、外に対する排除感というのが強く出てしまうので、お客さんが入り口を越えたら、自分が感じる『自分が入っていいところ』まで入っていきける、フリーな感じをつくりたかったです。たとえば土間というのはここまで入っていいよねという目印になります。では、そこからアトリエ内に1歩上がるのはどうか。そこを上がったら、奥まで行っているのかどうか。確かめるためには、必然的に声をかける必要がある。中に入った人と迎え入れる人が、コミュニケーションをうまくとらないことには、この空間の中で心地良く過ごせない。コミュニケーションというのとはとても面倒なことなので、そんなことが必然的に起こることで、中の人と外の人が混じり合います。1時間前までは外の人間だと思っていた方が、思いきって中に入り1時間経過することによって、当事者のひとりとして感じられる。次に来る時はまるで当事者のように友

味があるんです。ここが形になるための自然な成長のしかたというのがあると思うので、そこを大事にしていきたいと思っています。どちらかというと、『実験』という感覚の方が強いですね(笑)。実際には、ここをひとつのリノベーションや空き家活用のショールームとして開放しながら何も閉ざさずにすべてオープンにしていくことを大事にしています。この場の専門的な評価を受けられるようにするのは自分たちの役割だと思っていますから、価値を保ち続け、さらに高めていきたいと考えています」



川幡祐子
かわはた・ゆうこ

一般社団法人大正・港エリア空き家活用協議会 (WeCompass) 代表理事。民間の都市計画系コンサルタントで、住宅政策分野の調査や計画策定に従事。2006年から大阪市立住まい情報センターで、専門家団体、NPOなどとの協働によって住まいまちづくりに関する普及啓発活動を実践。大阪市住宅供給公社企画事業課にて公的賃貸住宅でのリノベーション、団地再生事業に従事した後、現職。

細川裕之
ほそかわ・ひろゆき

オルガワークス株式会社専務取締役。2013年、個人デザイン事務所「TENG Meister」を立ち上げて独立。その後同社役員を兼任。「コト・場・ヒト」に関心をもち、シェアオフィス「ヨリドコワークキン」や、シェアアトリエ「ヨリドコ大正メイキン」の企画運営を手掛けるようになる。クリエイターをサポートする、ビジネスコンサルティングやイベントプロデュースのほか、地域再生につながる教育やまちづくりへの関わりも広がっている。